

夜の太原府には不思議な空気が逆巻いていた。希望の中の絶望と絶望の中の希望が、闇夜の中で同時にわき返っている。一軒の店の大戸がギイツと音をたてて開き、提灯を灯し弁当の手提げ籠を持った雇い人が、受験生の供をして出てきた。やがて次々と家々の表門が開き、提灯が現れた。受験生の中には、幼さが残る顔に得意気な色を浮かべた若者もいれば、背を曲げ暗い顔をした七十を越えた老人もいた。足音が次第に高まり、やがて遠雷のようなくぐもった響きになっていく。提灯と人の流れはゆるやかに蠢く奇妙な河となり、無数の支流が一つに集まって最後にはゴウゴウと流れる大河となった。

喬家の太原大徳興の支店では致庸が顔中に汗だくになって八股文を暗唱していた。

「もしそれ……もしそれ……」

提灯を掲げた長栓が駆け込んできて叫んだ。

「若旦那様！ 若旦那様！ お時間ですよ！」

致庸は痲癢を起こして本を床に投げ出すとぶつきらぼうに言った。

「ちよつと待て！ この八股文のおかげで頭が混乱してるんだ！」

「旦那様ときたら、戦の直前になって慌てて武器を磨いてるようじゃ、どうにもなりやしない」

長栓はつぶやくと渋々と下がった。

いきなり手にした八股文を音高く卓上に叩きつけると、致庸はカラカラと笑いだした。

「喬致庸ともあろうものが、兄さんの手紙一通でびびるなんて！」

雪瑛がいぶかしそうに訊ねた。

「なんでですって、お従兄様の手紙は脅しだったの？」

「この世で最も喬致庸のことがわかってるのはうちの兄だよ。兄さんはわたしの子どものころから科擧なんか好きじゃないってことを知りぬいているから、わたしがまともに試験に取り組まず適当に答案をこねくりまわしてすぐに出てきちゃうんじゃないかって心配してるのさ。それにわたしは昔から商売なんて言葉を聞くだけで頭が痛くなるってこともお見通しだ。だからこんな手紙を書いたんだよ。自分の病気はもう助かりそうにもないから、今回わたしが合格しなかったら家に戻って家業を継げだなんて。ハハハ、兄さんはそう言えばわたしがびびって一念発起すると踏んだのさ。がんばりさえすれば必ず合格するとわかっていてね。ハハ、兄さんときたら……」

雪瑛は一旦ほつと肩の力をぬいたが、すぐに緊張した面もちになった。

「でも、万一……」

「いいや、ありえないよ。兄さんとはもう話がついてるんだ。家の商売は兄さん、学問はわたしってね。それにわたしに家業を任せたりしたら兄さんだって安心できやしないさ。天が墜ち

てでも来ない限りね！ でも天が墜ちてくるなんてありっこないんだ！ 長栓、馬車の準備を……」

喚ばれて長栓が駆け込んで来ると、致庸は卓上に積み上げられた八股文の本を地面に押し崩した。

「行くぞ、ここは臭くって！ これ以上ぐずぐずしていたら倒れちまいそうだ！」

致庸は鼻をつまんで外に向かった。雪瑛はそのさまを見ておかしいやら気持ち焦るやら。「ふたりとも行ってしまったら、わたしはどうすればいいの？」

「きみは来なくていい。今日は試験場の外は人も車も多いから、怪我でもしたら大変だ。ここで待っていてくれ。わたしが龍門（試験場の正門）を入ったら、長栓を返して夜通しきみを祇県に送っていかせるから！」

「いやよ、わたしも送って行くわ」

「それじゃ……急いでくれ！」

致庸が渋々応じると雪瑛は小躍りしてすぐに一緒に出てきた。

山西の貢院（試験場）の外では、次々と乗り付けられた馬車から長袍馬掛（中国伝統の礼服）に衣冠を整えた生員たちが陸続と降りてきた。人々は互いにお辞儀をし、時候の挨拶を交わしている。陸家の馬車も遠くからやって来た。車中の玉菡は女装に戻り、堂々たるご令嬢然として懐に猫を抱いている。ちよつと窓布を持ち上げてちらりと外を見ると陸大可を振り返った。

「お父様、ここが山西の貢院ですの？」

「そうだよ、男の子でなくてよかったな。おまえがもし男の子だったら、子どもの頃から学問

をさせられて今頃はここに連れて来られてヒイヒイ言っておったろうな！」

玉菡はいかにもあどけない様子でペロリと舌を出した。

「おまえはここに座って待っておいで。わたしは我が家を大商人にしてくれるのはだれか、ちよつと行って見てくるよ」

玉菡は笑ってうなずくと、再び興味津々で外を眺め始めた。

陸大可が商人たちが集まっている方へ歩いて行くと、あちこちから声をかけられた。平遙の林という商人が笑いながら言った。

「陸のご主人、ここんどこあんた、お嬢さんを連れて太原府中を歩き回ってよい縁談を捜しているそうですな。今日ここに来たのも、郷試を受けに来た秀才の中から意中の婿殿を捜すつもりですか？」

「ハッハ。林のご主人、山西でできるやつはみな商人になるもんですよ。こんな所に試験を受けに来るような秀才連の中に陸大可の意中の婿などいるものですか？」

商人たちもこれにはもつともだと笑ってうなずいた。

馬車の中では玉菡も一緒になって笑っている。それを見ていた明珠はじろりと玉菡に睨まれた。しかしすぐに玉菡のまなざしは思わしげに曇る。

「お嬢様、あの秀才さんたちのどなたか探していらっしやるんですか？」

「お黙り！ ますますつけあがるわね、知らない人ばかりなのに、誰を探すっていうの？」

この時、突如兵隊が一行縦隊でやって来て貢院を取り囲み、指揮官が言った。

「門を閉める！」

龍門がギイツと音を立てて閉ざされ鍵がかけられると、刀を帯びた兵士たちが威風堂々と門の前に立った。指揮官が再び号令をかける。

「棘を挿せ！」

兵士らが走って行って壁を取り囲み、ハシゴをかけて塀に登ると、一本一本棘の棘を塀の上に挿した。ほどなくして遠いところで砲声が轟くと、一頭の速馬が走ってきて馬上の人が叫んだ。

「静粛に！ 勅命大臣様のおなりだ——」

人々は鳴りを潜めると、すばやく威儀を正した。

まず儀仗兵の一隊がやって来て、中間に胡沅浦と哈芬の大きな輿があつた。馬で来た胡叔純が慣例に従って声を張り上げた。

「聖旨である——」

人々は一斉に跪いた。胡沅浦と哈芬が輿を降りると、胡沅浦はゆっくりと歩み寄り、聖旨の入った筒を高々と龍門外の龍架に置き、香をあげて拝跪した。後ろに従う土地の有力者や生員たちも一斉に跪き、笛や太鼓が鳴り響いた。やがてすぐに刻限となり、胡沅浦は静かに命じた。

「門を開けよ！」

それから胡叔純が長々と声を張り上げた。

「門を開けよ——」

正門にいた指揮官も声を張り上げて応じる。

「門を開けよ——」

兵士らが力を込めて門を推し開いた。生員たちは一列になって龍門をくぐり、兵士たちが受

験生の身体検査を始めた。

致庸の馬車はしかしまだ避難民であふれた商店街の渋滞に巻き込まれていた。長栓は焦って顔中汗だくになり、馬を鞭打ちながら「どいてくれどいてくれ」と大声でわめいたが何の役にもたたず、道は益々込み合っていく。致庸は避難民の数の多さに、馬車を飛び降りて尋ねた。

「もし、お尋ねします、どちらからいらしたんですか？」

杖に縫った足菱えの老人が長嘆息して答えた。

「実を言えば、わしらはみな潞州の織職だったんですがね。毎年山西商人が湖州から仕入れて戻った絹糸を織り、都や長城の北で売りさばいてなんとか暮らしを立てておったのですが、ところがここ数年南方で戦があつて絹が入って来なくなつた。これではわしらも生活が立ちゆかず、みすみす一家が飢え死にするよりはと、ここまで流れてきた次第で」

致庸は悲しくなり、顔色の悪い壮年の男に顔を向けると同じことを尋ねた。

「あなたがたは？」

男は汚れた手を致庸の顔の前に差し出して物乞いしながら、悲惨な様子で言った。

「わしらは蒲州の者です。今までずっと山西の祁県、太谷、平遙の三県の茶商の下で、武夷山からキャフタへ茶を運んでおりましてね。暮らし向きは苦しくとも、それでもなんとか一家の口を養うことはできておつたんですが、長毛賊が反乱を起こしてからは、茶を運び出すのもままならない。祁県の水家や元家のような大茶商も商売ができなくなり、わしらもこうして方で物乞いをして糊口をしのぐ有様です。旦那様、お哀れみくださいまし、どうか銀子をお恵みください！」